

研究余滴

カタログをよむ話

水田 洋

(名古屋大学教授)

16年まえ(1952年)の12月のことである。ヨークのゴドフリー書店からきた古本のカタログをよんでいたばかりは、つぎのような記述に気がついた。Cappe, (New-come) A sermon preached on the 13th December [1776], the late day of National Humiliation, to a congregation of Protestant Dissenters, in Saint-Saviour Gate, York. Small demy 800, half calf (joints weak), A. Ward, York 1676 (sic). 25/-. Carries Adam Smith's bookplate. キャップというのは、ユニテリアンの牧師で、アダム・スミスより10歳わかしく、1756年から1800年まで、ヨークの聖救世主門礼拝堂の牧師をしていた人であって、D. N. B.にもでているのだからひとかどの名士と考えられる。したがって、ヨークの古本屋にかれの本がでたことには、なんのふしぎもないのだが、問題は、なぜその本にアダム・スミスの蔵書票がはられていたのか、ということである。

スミスの蔵書のうち、カニンガム家にゆずられたものの一部が散佚して、古本屋にてたり個人の蔵書として報告されたりすることは、しっていた。しかしそれは、せいぜい1930年代ぐらいまでで、第二次大戦後にはありえないと(なにもそう断定する理由はないのに)、きめこんでいたのである。さて、この獲物をどうしたらいいのか。いまでこそ電報も送金もかんたんだが、そのころはそうではなかったし、だいいちこちらのふところぐあい、かんたんではなかった。結局、この本は見送らざるをえなかったし、どこからきてどこへいったのかも、つきとめることができなかった。おそらく、ぼく自身のスミス蔵書への関心が、まだつよくなかったのだろう。1954年秋にグラズゴウ大学にいたとき、大河内さんとスミス蔵書を点検してみ、ボナーのカタログの不正確さに気がつき、蔵書全体の再検討にとりかかったばかりは、1967年の『ボナー・カタログ補遺』の出版まで13年にわたって、古本の群とつきあうことになってしまったが、きっかけはすでに52年にあった。

ヨーク市の古い石だたみの道は、あるくこと自体にぞくぞくするような楽しさがあった。1954年のクリスマス休暇をリーズですごしたばかりは、ある午後、はじめてゴドフリー書店をたずねた。初対面ではあったけれども、閉店時間を延期して、ぼくが店のすみずみまでひっかきまわすのをゆるしてくれた。「なんどもこられると

いうわけではないでしょうから、どうぞごゆっくり」というのである。この店は、戦前には丸善とも取引をしていたそうで、カタログはそのごもずっと送られてくる。しかし、数年まえに経営者がかわってからは、古本の質量ともに低下してほとんど収獲がない。にげた獲物はおおきいといわれるように、ぼくにはキャップが写すられないのである。

1966年の夏に、しごとをしあげるために、ニディンバラ大学神学部図書館をたずねたとき、新任のハワード館長が、サザビーの古書競売カタログに、スミスの蔵書が2冊でているのをみせてくれた。1966年1月31日～2月2日の競売にでたパロン・ドゥ・トーの回想記は、ボナーによって所有者不明として採録されているが、6月13日の競売にでたベルナールは、初見である。ありがたいとおもいながら、同時にうんざりしたというのが、いつわらぬところであった。こんな調子で競売カタログまでよむことになっては、時間がいくらあってもたりないからである。

サザビーが、書画こつとう商の名門であることは、ぼくも知っていたし、レスター大学のミーク夫妻にしても、その程度の知識しかもっていなかった。とりあえず関係のあるカタログだけでも手にいれたいとおもっていたら、偶然に、ケンブリッジ行の車中でまきにすわったのが、サザビーの東洋部のオビー君で、カタログの件がかたづいただけでなく、家族ぐるみかれの自宅に招待されることになった。

ところが、ケンブリッジでスラッファにこの収獲のはなしをすると、かれが2点のうち一つをしていたのにはおどろいた。サザビーの競売カタログに一応目をとおしているらしいのである。日本で、2週間に1冊ぐらいのわりあい外国からくるカタログをよみながら、いつも、これは時間の浪費ではないかという反省にくるしめられているぼくには、スラッファが、おそらくヨーロッパ中からくるであろうカタログを、とにかく全部よんでいるということは、すくいでもありおどろきでもあった。「時間の浪費だとおもいませんか」ときいてみたら、「それはくるしい労働だけがほんとうの労働だという、伝統的な偏見だよ」とけろりとしている。つまり、カタログをよむのがたのしければ、それでいいじゃないかというのである。

カタログをよみ、獲物を見つけるのは、たしかにたのしい。しかし、特定の本だけをしさがしているわけではないから、何をかい何をすてべきかをきめなければならないから、またしばしば、かいたくても経済的理由であきらめなければならないから、くらしもすくなくない。将来自分にとって何が必要になるか、周囲のだれかが何を必要とするだろうかまで考えるとき、知的冒険のたのしみは、負担にかわってくる。まして、それらのカタログから、主題別書誌をつくろうなどとくわだてたら、カタログそのものの計画的収集をやらなければならない。ヒッグズは『経済学書

誌』をつくるとき、古本屋のカタログをかなり利用したらしい。かれはあらゆる情報をうのみにして、そのまま年代と主題に分類してならべたために、個々の記載の信頼度がまちまちになり、結局、全体としてあまり信用できないということになってしまったが、開拓者のしごととしては、あの方法しかなかったかもしれない。1751年から75年までだから、比較的出版物もすくなかったとはいえ、古本屋のカタログから一々それをぬきだすのは、相当な根気がいる。当時の出版目録なんかありはしないから、図書館蔵書と古本屋のカタログだけが、たよりになるわけで、ただ、そうしてあつめた情報をそのままならべられては、こまるのである。

いま、マルクス主義書誌というようなものをつくるとしても、コピー・ライト図書館の蔵書だけでなく、やはりこの方法にかなり依存せざるをえないだろう。出版物の数が激増し、しかも、政治的理由で評価が激変してきたために、選択された書誌にたよることができないのである。もちろん、そんなことをやりだしたら、たのしみどころではないにきまっている。

ぼくはこれまでに、一定の目的でカタログをよんだことが二度ある。第一は、『社会科学年表』（山田秀雄編）をつくるときで、前記ヒッグズをはじめとして、S. T. C. やトマスソンなどをAからZまでよみ、さらにはD. N. B. から著作家を全部ひきぬぐことまでやった。そのうえで、社会科学上の重要著作を選定し、それにかんするデータを確定していくのであるが、もちろん、著作そのものを全部よんでいるわけではないから、盲へびにおじずの勇気がなければ、やれはしない。自分でもあきれることがあるけれども、知的冒険のたのしさ、くるしさ、おそろしさは、きりはなせないもののようである。

二度目は『アダム・スミス蔵書』のときであり、ブリティッシュ・ミュージアムで、あの大幅帳のようなカタログを、もちろん全部ではないがずいぶんよんだ。というのは、スミス自身の蔵書目録の記載が、きわめて簡単なために、原題名を確認しなければならなかったのである。Smith's Select Discourses とかいてあるばあいに、なにスミスかわからず、なんの専門家であるかもわからず、とにかく大幅帳一冊をこえるスミスの部を、はじめからよんでいって、セレクト・ディスコースズをふくむタイトルにぶつかるまで、さがさなければならない。さがす目標は一応ははっきりしているとはいえ、他人の蔵書の題名なのだから、本当のところ、ぼくにはどうでもいいのである。一日中そういう労働をやっていると、腰はいたみ、目はかすみ、頭はからっぽになる。貸出係が、相互にほとんど関連のない本を毎日何冊も、かりてはかえす日本人に、気がついたらなんとおもったのだろうか。